

## 附属岡崎小学校の1年生「くすのき学習」の実践

—「大すきな人とどけたい 手作りあつたかはがき」—

仲 田 英 成 (愛知教育大学附属岡崎小学校)

中 野 真 志 (愛知教育大学生生活科教育講座)

(2006年10月31日受理)

### A Practice in the First Grade at Okazaki Primary School of AUE

Hidenari NAKADA (Okazaki Primary School of Aichi University of Education)

Shinji NAKANO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

**要約** 愛知教育大学附属岡崎小学校では生活科と総合的な学習を「くすのき学習」と称している。そして、「くすのき学習」を「仲間への所属感をもとにした活動を主として、問題解決を図りながら展開する創造的な学習」と定義し、求める子ども像を「対象や仲間とかかわりを強めながら、自らを高めていく子ども」としている。それゆえ、生活科と総合的な学習とは基本的な理念では相通ずる部分が多いが、仲間とともに行う活動を通して自己理解と他者理解を深めることを重視している点に特徴があると言える。本小論は、2006年度の1年生1学期の「くすのき学習」の実践をまとめたものである。子どもの思いや願いをいかに高め、いかに願いに基づいた活動を支え、その結果、子どもがどのような学びを得たのかについて論じる。

**Keywords** : 生活教育, くすのき学習, かみすき

#### I はじめに

愛知教育大学附属岡崎小学校では、大正8年の研究会以降、子ども一人ひとりの個性と生活体験を大切に、「子どもが生活のなかで経験を通じて、生活をよりよいものにしていくために必要な知識や技能を自ら学び取り、人間性を豊かにしながら、生活を深め、広げていく、創造的・発展的な教育活動」である「生活教育」の実践、研究に取り組んでいる<sup>1)</sup>。

2000年秋から、「学びの経験を生かす授業」を研究主題に掲げ、子どもたちが価値意識を更新する背景にある「学びの経験」に着目し、その学びの経験を生かす授業の確立をめざして研究してきた。その4年間の成果を、2004年11月に『学びの経験を生かす授業』(明治図書)としてまとめ出版した<sup>2)</sup>。

その後、新たに、現在の子どもの取り巻く社会状況と生活環境、子どもの育ちをとらえるなかで「本気で学び続ける子ども/生活分科の本質に迫る」という研究主題を掲げ、研究に取り組んでいる。生活教育では、子どもの生活のなかに生まれてくるいくつもの分化された側面をより豊かにすることをねらいとする。一つの側面が豊かになることは、その側面ならではの、ものの見方や考え方、感じ方が養われることである。この「ものの見方や考え方、感じ方」が「価値意識」と定義され、生活教育における教科を通して、子どもの生活のなかにある一つひとつの側面ならではの価値意識を養っていくことが目指されている。それゆえ、生活教育における教科を、一般的に考えられている教科と区別するために「生活分科」と呼んでいるのである<sup>3)</sup>。

附属岡崎小学校では、「生活により、生活まで」を根底におく生活教育が貫かれてきたので、生活分科における学びは、当然、子どもにとっては生活の一部である。現在、継続中の研究では、対象を鋭く見つけ、仲間と深くかかわるなかで、価値意識を更新し、自己の成長を感じることで、生活に生かしていこうとする子どもの姿を「本気で学びつづける子ども」と定義し、生活分科の本質に迫る授業において、この姿を求めていくという研究に取り組んでいるのである<sup>4)</sup>。

ところで、附属岡崎小学校では生活科と総合的な学習を「くすのき学習」と称している。そして、「くすのき学習」を「仲間への所属感をもとにした活動を主として、問題解決を図りながら展開する創造的な学習」と定義し、求める子ども像を「対象や仲間とかかわりを強めながら、自らを高めていく子ども」としている<sup>5)</sup>。より具体的には、対象に浸り込みながら、思いや願いを高め、ものの見方や考え方、感じ方が異なる子とのかかわり合いによって生まれた新たな視点をもとに活動を見直し、自己の活動を振り返り、活動の価値や自己の成長を実感する子どもを目指しているのがある。それゆえ、生活科と総合的な学習とは基本的な理念では相通ずる部分が多いが、仲間とともに行う活動を通して自己理解と他者理解を深めることを重視している点に特徴があると言えるだろう。

本小論は、先述した研究の一貫として取り組まれた2006年度の1年生1学期の「くすのき学習」の実践をまとめたものである。子どもの思いや願いをいかに高め、いかに願いに基づいた活動を支え、その結果、子どもがどのような学びを得たのかについて論じる。

## II 単元の構想

### 1. 学級をとらえ、願いをかける

1年生になり、友だちが増えることに喜びを感じている子どもたちには、友だちの誕生日に、折り紙で作った手作りのものや、自分で描いた絵を渡し、友だちとのかかわりを深めようとする姿が見られる。しかし、そのプレゼントを見ると、あまり深く考えずに、簡単に作れるものでまかせている子が多い。そこで、こうした子どもたちに、もらった手作りのものに相手の思いを感じたり、相手への思いを込めながらもの作りをしたりできる子になってほしいと願いをかけた。

### 2. 久美をとらえ、願いをかける

きょうは、おともだちがあそびにきました。シェークをつくりました。とてもおいしかったです。でもいるものは、たいへんです。こう（お）りをいれてしおをいれてジュースをいれてプロペラをつけてさんじゅつかいふってプロペラをまわしたらできるよ。

（4月21日 久美の生活日記）

既製品ではなく手作りのシェークを作って味わっている久美。「たいへんです」からは、手間がかかり面倒くさい作業でも、自分で作ることを楽しんで行う姿がうかがえる。また、シェークを作る手順を説明している部分から、物事を筋道立てて考えることができる様子がわかる。一方、久美はいろいろなことについて教師に確認を求めてくることが多く、大人に判断を依存していると言える。放課には、座っているひざの上に乗ってきたり、廊下で並ぶときもべったり寄り添ってきたりして甘える姿勢も見られる。自分を見てほしいという気持ちの表れと同時に、愛情を求めているようにも見受けられる。

物事をていねいに順序だてて考えようとするよさをもつ久美であるが、いろいろなことを気にしてしまうために、自分らしさを出し切れないでいるように感じられる。しかし、自分でがんばろうとする姿勢がみられるので、彼女のよさを認め、自分で考えて活動した結果、成功したことをほめることが大事であると考えた。そして、以下のように久美へ願いをかけた。

#### 久美への願い

ていねいな作業をするなかで自分で考えて活動した成果を自分で感じ、自信をもってほしい。そして、活動にひたり込むなかで、自信を深め、自分らしさを思う存分発揮してほしい。

### 3. 本気で学び続ける子どもを引き出す支援

ア 切実感をもって対象にかかわらせるための教師支援

- 問題解決にむけて試行錯誤を繰り返そうとする気持ちを高めるために、成功体験を積んだ後、あえて失敗体験をする場面を設ける。
- 子どもの目的意識を高めるために、人とのつなが

りをもたせる活動を仕組む。

イ 自己理解を深め、他者理解の姿勢を強めるための支援

- 葛藤の末の自己決定を促すために、かかわり合いでの意図的指名と板書により、価値観のずれを鮮明にさせる。

## III 実践の概要

### 1. 紙すきに興味をもつ久美

4月27日に、小原の「和紙のふるさと」へ行き、紙すき体験をした。ここでは、誰でも簡単にきれいな和紙を作ることができる。子どもたちに、自分たちでも紙を作ることができるということを実感させるために、紙すきの実習を行った。



（紙すきを体験する久美）

かみすきのじをかくとき、ゆびでかくことがおもしろかったです。またできてみたらじょうずにできたなとおもいました。また、きのあみでみずがしたにおちるのをやるとき、みずがいっぱいこぼれて、わたしにもかかりました。でも、じょうずにできました。

（4月27日 久美の学習記録）

※くみさんは、じがじょうずにかけたね。みずがしたにおちるところまでよくみてかけましたね。

ここで久美は、指で字を書く字すきを選んだ。学習記録からは、「みずがしたにおちる」というように、細かいところまで目を向けて活動している。



（自前の道具で紙すきをする理恵）

単元カリキュラム (36 / 36完了時) 単元「大すきな人とどけたい 手作りあったかはがき」

○ 活動の時数 ◎ かわり合いの時数 □ 思いや願い

単元前の子どもの姿

手作りのものをもらったり作ったりすることはあるが、手作りのものに深い意味を感じていない子ども。

【教師支援】

- ※1 相手に喜んでもらいたいということを実感させるために、家でのお手伝いの活動を取り入れた。
- ※2 人とのつながりを意識させるために、手紙ごっこをした。この活動は、出会わなくても継続して行う。
- ※3 自分でも紙を作ることができると実感させるために、小原の「和紙のふるさと」へ行き、和紙作りの実習を行った。
- ※4 紙作りがうまくできず、困っている子どもたちにも活動の見通しをもたせるために、牛乳パックからはがきを作っている柴田さんや田さんがきき方を体験させた。
- ※5 はがきの上手な作り方を具体的に考えさせるために、子どもたちが必要としたとき、時計や計量カップなどを準備する。
- ※6 自分の作ったはがきに満足してしまっていたり、まだ完成に近づいていないかと思ったりする子どもたちに、自分の作品を見つめ直させるために、友だちのはがきを見合う時間を設ける。
- ※7 大すきな人への思いを込めて作っている子どもに自信をもたせるために、朱記や対話で思いを込めるための工夫を認め、支える。
- ※8 自己の成長を実感させるために、思いを込めて作ったハガキを出した相手からほめられるように、お願いをしておく。
- ※9 手作りはがきよさを実感させるために、活動を振り返るなかで、はがき作りや友だちのよさを実感している子を指名する。

1年生になっているんなことをがんばるよ

※1 自分でできたよ ※1 お手伝いをしたよ ※1 手紙ごっこをするよ ※2

- ・一人でバスに乗れたよ (久美)
- ・自分の食器をかたづけられたよ (厚司)
- ・ペアの子に渡したら返事をくれたよ (亜衣)
- ・お母さんが喜んでくれたよ (裕太)
- ・ペアの子に渡したら返事をくれたよ (亜衣)

小原の「和紙のふるさと」へ行って和紙を作らるよ

※3 ⑤ 字すきをするよ 葉すきをするよ 不思議だったよ

- ・指で書くところがおもしろかったよ (和也)
- ・もみじをつけるところが楽しかった (佳織)
- ・どろどろした白い水がどうして紙になるのか不思議 (亜衣)

① 自分ができるなんてびっくりした

- ・もう1回作ってみたいよ (香穂)
- ・ほめられてうれしかったよ (一平)
- ・今度はすきなものを切って入れたい (香穂)
- ・お母さんに素敵と言われたよ (亜衣)
- ・学校でも作りたいよ (厚司)
- ・手紙ごっこをするよ (厚司)
- ・今度は先生に出すよ (恵太)
- ・インターネットで調べたよ (静花, 厚司, 純也, 世奈, 浩二)
- ・自分の好きな新幹線の絵を描いたよ (浩二)
- ・牛乳パックから作れるよ (千絵, 紗江)
- ・ペアの子と遊んでいる絵を描いたよ (紗江)
- ・家で作ったけど形がきれいにならなかったよ (紗江)
- ・手紙は楽しいよ (紗江)

※4 ② 柴田さんに牛乳パックからはがきを作るやり方を教えてもらおうよ

- ・飾り付けがおもしろかったよ (朋子)
- ・うれしかったよ (久美)
- ・簡単にできたよ (和也)
- ・ミッキーの絵 (伸吾)
- ・お母さんがほめてくれた (久美)
- ・2枚作れてよかった (直子)
- ・おばあちゃんに書いて渡すよ (紀香)

④ ① もう一回やりたいよ

- ・今度は自分たちだけではがきを作ってみようよ (雅代)
- ・失敗したよ (誠二)
- ・うまくできたよ (真美)
- ・字も絵もお家に帰ったら書くよ (千絵)
- ・時間がなかった (誠二)
- ・友だちが教えてくれた (真美)
- ・水分取ったから (久美)

※5 ④ ① 今度はもっとじょうずに作るよ

材料	やり方	送ったよ	手紙を書くよ
・液が足りない (美咲)	・崩れた (隆志)	・ゆか先生へ (世奈)	・お母さんが料理を作っているところの絵を描いたよ (裕太)
・液がとろとろ (紀香)	・網から落ちた (和香)	・ともこ先生からお返事をもらったよ (里恵)	
・牛乳パックが足りない (隆志)			

大すきな人へあげるはがきを自分で上手に作りたい

⑧ 上手に作るために 大すきな人にあげるために

- ・牛乳パックをしっかりはがすよ (昌弘)
- ・お母さんにかわいいはがきを (美咲)
- ・ミキサーでしっかり混ぜるよ (紗江)
- ・ペアのかんなちゃんに (里恵)
- ・水の量を増やすよ (裕太)
- ・折り紙をちぎって入れるよ (世奈)
- ・水の中で棒をゆらすよ (隆志)
- ・和宣君に金色の紙で (恵太)
- ・スポンジでぎゅーっと水を切るよ (太一)
- ・葉っぱを入れるよ (伸吾)

まあまあ上手にできたかな

- ・もう手紙を書いて出せるよ (紀香)
- ・まだ下手だからもっと作りたいよ (久美)

※6 ① 友だちの作ったものを見てみよう

思い

- ・バスの整理券を入れたよ (紗江)
- ・ピアノの先生に音符の絵を入れた (真美)
- ・白いハートの形にしたよ (亜衣)
- ・おばあちゃんのために牛乳のラベルを入れた (里恵)
- ・剛士君の薄くてちゃんと四角い (仁志)
- ・保育園の先生が好きな水玉模様 (朋子)
- ・国旗みたいできれい (厚司)
- ・天国のおばあちゃんに優しい色で (千絵)

そこまで考えたなんてすごい

※7 ④ もう一度作り直してみよう

- ・スポンジでおしたよ (和香)
- ・色をつけてみたよ (誠二)
- ・飾りを工夫したよ (世奈)
- ・昂大君みたいにゆすったよ (裕太)
- ・紫にしたよ (厚司)
- ・イギリスの旗を貼ったよ (純也)
- ・白くして字や絵をかくよ (和也)
- ・緑にしたよ (厚司)
- ・キラキラの折り紙を入れたよ (久美)
- ・ビーズを入れたよ (哲也)

いいはがきができてきたよ

※8 ③ ① 自分で作ったはがきで手紙を出したよ

※9 はがき作りは楽しい 自分でできてよかったな 友だちのおかげだよ

- ・ママにあげたら喜んでくれてお返事をくれた (紗江)
- ・だんだん上手になってきてよかった (純也)
- ・みんなが私を支えてくれて何とかできた (静花)
- ・またはがきを作りたい (久美)
- ・紙すきをうまいと言われたからうれしかった (伸吾)
- ・冷史君が教えてくれたから上手にできた (久美)
- ・はがき作りは楽しかった (里恵)
- ・自分が成長したと思った (美咲)
- ・飾りをもらった (浩二)
- ・もっと上手になりたい (恵太)

他に人にも出したいな      自分でもびっくりしたよ      これからも仲よくしたいな

人に喜んでもらえるものを作るのは気持ちいいね

単元後の子どもの姿

手作りのものにはよさがあることに気づき、もらった手作りのものに相手の思いを感じたり、自分の手作りのものに思いを込めたりすることができる子ども。

5月9日に里恵が紙すきのキットを持ってきた。家で紙すきごっこをやったことがあるという。そこで、学級みんなの前でやってもらうことにした。のりを塗った紙をちぎって水の入ったペットボトルに入れ、しゃかしゃか振ってすき枠に入れた。それを絞って、窓に貼った。あっという間にできてしまい、子どもたちも驚いていた。

わたしもやってみようとおもったよ。また、うちでうちでやってみようとおもいました。みんなでじゅんばんにやろうとおもいました。(5月9日 久美の学習記録)  
※やってみようとおもうのはいいことだね。ぜひやってみてください。くみさんならきつとじょうずにできるよ。できたらみせてね。

久美も、里恵と同じ紙すきキットを持っているようで、「うちでやってみよう」と思ったようである。学級のなかにも、自分もやってみよう、紙すきをもう一度やってみようという子が多く、学校で行うことにした。そこで、牛乳パックからはがきを作る紙すき名人を呼び、いっしょに作ることにした。ここでの、目的は2つである。1つは、牛乳パックからも簡単に紙ができることを体験すること。2つめは、簡単にしかもきれいなはがきが自分でもできることを知ることで、もう一度自分で作ってみたいという気持ちをもたせることである。

5月11日に、紙すき名人の柴田さん一行をお招きし、いっしょに紙すきを行った。このとき柴田さんをお願いしたことは、作り方を詳しく説明しないようにということである。できるだけ、淡々とはがき作りを進めて、後に子どもたちだけで作ったときに、なぜできないんだろうとか、どうやったらうまくいくんだろうとか、自分たちで考える余地を残しておくためである。

—〈略〉— このまえもかみすきをやったけど、つくりかたがちがう…とおもいました。まどにつけたらかみだらけでした。よつばをよんこがいっぱいでした。みんなおなじでまちがえてしまうかな…とおもいました。かみすきめいじんがごにきてくれてうれしかったです。かわかすじかんがいっぱいかりました。

(5月11日 久美の学習記録)

※つくりかたがちがうなんてよくきがついたね。どうちがったかな？

柴田さんたちといっしょにはがき作りをしてみて、小原で体験した作り方との違いに気づいた久美。二つのものを比較しているところが、彼女の視点のよいところである。ここまで久美は、紙すきを楽しんでいると感じて、もっとやりたいという気持ちをもった。

## 2. 思い通りにできない久美

5月18日、今度はすべて自分たちだけで紙すきをすることにした。実習を行う前の子どもたちは、自信満々に「自分たちでもできる」と思っていた。しかし、実際に始めてみると、牛乳パックを切ってお湯の中へ入

れたり、ビニールをはがすのはいいが、どこを使うのか、わかっていない。ミキサーにビニールもいっしょに入れていたり、水の量も、牛乳パックの量もいいかげん。すき枠に流し込むパルプ液の量もいいかげん。最後まで、ろくに絞らず、べちゃべちゃのまま窓に貼るので、垂れまくる。表面もでこぼこで、四角くない。というように、柴田さんと作ったときはがきとは、雲泥の差であった。

できたできないいろいろいるけど、わたしわ(は)できませんでした。なぜできないだろうとゆく(いう)と、ミキサー(ミキサー)がおは(わ)るときに、しぼってすいぶんをとってしまったかなとおもいます。またかみすきをやるときには、しっかりできるといいとおもいます。  
—〈略〉— またこんどは、じょうずにできるといいです。またこんどは、ぜんいんできるとよいです。また、やりたいです。すぐじょうずにやりたいです。

(5月18日 久美の学習記録)

※すごいね、ミキサーのことよくかんがえたね。こんどはきをつけるといいね。

初めて自分たちだけではがきを作ってみたが、久美の班は失敗した。「また、やりたいです。すぐじょうずにやりたいです。」からは、久美が本気になって紙すきにひたり込み始めていることがわかる。切実感をもち始めているといってもよい。これは、成功体験のあとに失敗体験をしたからこそ、できるはずなのにできない、こんなはずではない、という気持ちをもたせることができたと考える。

きょうは、こどもたちでかみすきをしました。しゅんやくんはかみすきをせいこうしたのだけど、わたしたちはかみすきのもとがなくてできなくてさみしかったです。

(5月18日 久美の生活日記)

しかし、その日の日記には、失敗した原因を「かみすきのもとがなくて」と、パルプ液が足りなかったことを指摘している。同じ班の他の子がパルプ液をたくさん使ってしまう、自分がやる時には残っていなかったのである。性格的に控えめな久美は、班のなかの他の子が作ってから自分が作っていた。

5月22日の2回目の紙すきでも同様に久美は他の子が先にやるのを指をくわえて見ていた。紙すきをやりたいという気持ちは人一倍強いのに、それを口に出して、他の子より先に行動に移すことができない久美の弱さがあった。そこで、久美の班に声かけをし、支援することにした。4人の作る順番をどうするのかということや、まだ作っていない子がいるのに一人で2枚も3枚も作るのはいかがということなどを話した。そして、事あるごとに久美の班の様子を気にして見ていくことにした。

5月24日には3回目の紙すきを行った。久美には手助けしたり、紀香と協力させたが、久美は材料が少なく薄いため自分で失敗と決めつけてやめてしまった。

班の他の子はできているのに、自分だけできなかった  
ので泣いてしまい、「もうくすのきやりたくない」と  
まで言っていた。

くみちゃんがしっばいしてないちゃったので、のりかもす  
こしかなしくなっていました。えきがとろとろで、み  
ずみたいだったからかな。(5月24日 紀香の学習記録)

久美と同じ班の紀香は、心配して学習記録に久美の  
ことを書いた。かわり合いの授業で、この紀香の気  
づきを久美にぶつけ、失敗した原因をしっかりと見つけ  
させたいと考えた。

T	はいじゃあ、のりかさん。
紀香	はい。くみちゃんが泣いちゃったので、 たぶん失敗したんだろうと思いました。
T	くみちゃんが？
紀香	くみちゃんが泣いちゃった。
T	ああ、悲しかったの。ううん、で？
C	なんで、泣いたの？
T	なんで、泣いちゃったの？分かる？
紀香	液がとろとろだった。
T	え、もっと大きい声で、聞こえるように。
紀香	液がとろとろだった。
T	液がとろとろだった。液がとろとろ。 (5月30日 授業記録)

授業では、紀香が久美が失敗した理由を発言した。  
しかし、失敗した理由である「液がとろとろ」の中身  
はあまり掘り下げなかった。それゆえ、下記のように、  
授業後の久美の感想には、「こんどは、なかなかした  
い」と、紀香の発言を聞いて考え直したようだが、今  
度はどうしたらうまくできるかということについては  
書かれていない。とろとろとは液がどんな様子なのか。  
実物を用意したりしてもよかったかもしれない。

じゅぎょうは、わたしは、のりかちゃんが、くみちゃんが  
ないからわたしもかなしくなっちゃったっていったから、こん  
どは、なかなかしたいとおもいます。わたしは、ピーズが  
とれたことをはっぴょうしました。こんどは、ピーズをつ  
けないで、かは(わ)いくしたいとおもいます。  
— (略) — (5月30日 久美の学習記録)  
※のりかさんのいけんをきいて、こんどはなかなかとおも  
ったことは、とてもよいことだね。ピーズをつけないと  
おもったのも、しんごくんのいけんをきいてそうしたの  
かな？こんどは、かなしくならぬようにするにはどう  
したらいいか、かんがえてね。

さらに、この授業では、手紙交換ごっこを行ってき  
た中で、自分で作った手作りはがきを大事な人に出し  
ている里恵や世奈がいたので、それを学級に知らせる  
ことで、大事な人に手作りはがきを出したいという思  
いや願いを高めたいと考えた。

T	実は今はがきを作ってるんだけど、作るだけじゃな くて作ったはがきを使っている人がいるんですね。
---	--

C	世奈ちゃんと、紀香ちゃん
T	知ってる？
C	前さ、先生が言ったもん。
T	世奈ちゃんじゃあ、持ってる？それで。
紀香	紀香も書いた。
C	(世奈さんが前に来て) テレビのスタート。
T	はい、世奈さんね、このはがき覚えてる？どうした んだっけ？
美咲	柴田さんと作った。
T	そうだね、名人の柴田さんと作ったんだね。
C n	あはは。手形だ。
T	これにね、世奈さんはね、こんなお手紙を書いてま す。読んでいい？ね、ねずゆか先生へだって。世奈 のこと忘れないでね。大好きだよ。また会えたら いいね。世奈より。今までありがとう、って書いてあ る。何で世奈さんこのねずゆか先生にお手紙かいた の？
世奈	ねずゆか先生はうちの卒園した時に、ゆか先生も 卒園しちゃうから、いなくなっちゃうから、忘れな いでほしいから書いた。
T	いなくなっちゃうんだ。へえー。
伸吾	僕も園長先生変わっちゃったよ。
T	はい、ありがとね。はい。
C n	僕の園長先生全然変わらない。私の園長先生変わっ た。
伸吾	俺ね、 <u>今度から園長先生に手紙かこ。</u>
C	<u>うちも。</u> (5月30日 授業記録)

世奈のはがきを見せることで、大事な人に手作りは  
がきを出したいという思いや願いを高めたいと考えた  
が、世奈は挙手をしていなかった。そこで世奈を指名  
し、彼女のはがきを紹介した。その結果、自分も手作  
りはがきを出そうというつぶやきが出た。しかし、思っ  
たより学級全体に広がりは見られなかった。それは、  
まだ子どもたちの思いが、手作りはがきを相手に出す  
までには至って行ってなかったからだろう。

6月20日、4回目の紙すきを行った。ここでは、こ  
れまで朋子など一部の子が、スポンジを持って来て紙  
の水を絞っていたので、班に1つ吸水用のスポンジを  
配った。そして牛乳パックの量も1人1枚と決め、前  
日に牛乳パックを煮た。

活動のなかでは、紀香が久美のやっていることに手  
を出そうとするので、「みんな、自分のことは自分で  
やろうね」と言い、久美には自分の好きなようにやる  
ように話した。その結果、久美は何とか半分の大きさ  
のはがきをつかった。しかし、彼女にとってはまだまだ  
納得のいくはがきはできていない。班活動のなかで  
自分の思い通りのはがきを作ることは、彼女にとって  
難しいことになっていた。

### 3. 紙すきのしかたを見直す久美

お手紙交換が日常的になり、手作りはがきを出すこ  
とを意識する子も現れてきたところで、さらにこの動

きを学級全体に広めたいと考え、手紙交換をやってみた感想を出し合った。

T	はい、どんなお手紙出したいのかなあ？
朋子	えーっと、 <u>もらう人が喜ぶ手紙</u> をあげたい。
T	お～？もらう人が喜ぶ手紙～？
T	ちょっと、これ聞きたいなあ、どんな手紙なんだろう、もらう人が喜ぶ手紙って。朋子さんどう？
朋子	もらう人がこういう手紙をもらうと喜ぶだろうなあって、イメージして書いてあげる。
T	例えば、朋子さんだったらどんなん出す？
朋子	女の子だったらかわいいやつだとか、男の子だったらカッコいいやつだとか。
T	はい。英二君、なんか言った？もらう人が喜ぶ手紙ってどんなの？
英二	<u>手作りはがき</u> 。
T	ほー、手作りはがき？を送ると？喜んでくれる？
朋子	ほ～。あー、そういえばそうじゃん、先生喜んでじゃんねえ。先生、うれしかったじゃん。

(6月23日 授業記録)

お手紙交換をやってきて、子どもたちは多くの友だちや大人にはがきを書いてきた。そして、今度はどんな手紙を出したいかを考えていたとき、朋子が「もらう人が喜ぶ手紙」を出したいと言った。これに対して、英二が「手作りはがき」をあげたいとかかわった。ここにきて子どもたちは、手作りはがきには人を喜ばす力があることに気づき始めた。

6月26日、5回目ははがき作りを行った。今回は、今まではがき作りとは違い、もらう人が喜ぶはがきを作ることを明確にするために、誰に渡すはがきか考えて作ろうと呼びかけた。すると里恵は、死んだおばあちゃんが牛乳好きだったから、牛乳パックのラベルを入れた。真美は、大きなピアノの先生にあげるために、音符の絵を入れたはがきを作った。また、全体的に色をつけずに直樹のように白くする子が多かった。



(パルプ液を敷き詰める久美)

久美は、紀香と2人でミキサーを使っていた。しかし、いつものように紀香が先に作ってしまい、余ったパルプ液で久美は作り始め、パルプ液を手ですくい、一つ一つ網の中に敷き詰めていた。スポンジで押さえ、

はがすとき、注意しながらはがしているが、どうしても隙間ができてしまう。

<p>今日は、まっしろなはがきをつくりました。今日から、<u>しかくい</u>かみすきをやりたいです。今日は、みんなよりおおいにかみすきができたけど、これからはできないかもしれないから、ていねいにつくりました。1の2のこんどうさとこちゃんにあげようとおもっていたから、さとこちゃんにこころをこめてつくりました。まっしろでもよろこぶかなとおもいました。(6月26日 久美の授業記録)</p> <p>※ これからはできないかも、なんてしんぱいしなくてもいいよ。くみさんは、ていねいにつくれるんだから。ざいりょうのぎゅうにゆうぱつくのえきさえあれば、じょうずにできるよ。じしんをもっていいよ。「こころをこめてつくりました」といういいかたがとてもいいね。</p>
---

「まっしろなはがき」、「今日から、しかくいかみすきをやりたいです」とあるように、久美はこの日から手作りはがきに対する価値を自分なりにはっきりもったように感じる。その背景には、「もらう人が喜ぶ手紙」を意識し、久美なりにきれいなはがきをつくろうと考えた結果、「まっしろ」「しかくい」というキーワードが出てきたと考えられる。家でも紙すきを行い、お父さんやお母さんに手紙を渡していた久美だから、学校で作ったはがきを、一番の親友のさとこにあげたいと思ったのだろう。しかし、何とかはがきらしい形の紙は作ったが、「これからはできないかもしれない」と、まだ自信が持てない様子でいる。そこで、久美に四角く作る自信をもたせると同時に、今後のはがき作りの活動に目標をもたせたいと考え、活動を見直すかかわり合いをもった。

隆志	初めて薄くできてうれしかった。
T	ほー。初めて薄くできた。どうして薄くできたの？隆志君。初めてっていうことは、今までできてなかったんだよね。で、今回初めてできた？薄く。何でだ？何でだと思う？
隆志	やり方を変えたから。
T	やり方を変えた？どんな風に？
隆志	水の中でゆすった。
T	えっ？隆志君が今、こういうことを言ってくれました。これわかる？みんな？
C	水の中でゆすった？
T	隆志君、これやってもらっていい？今。ここで。じつは、先生用意したんですけど。えー、ここに先生用意しました。紙すきの枠、網、それから、牛乳パックを溶かしたやつ。

(6月29日 授業記録)

この授業では、上手にできた子を出し、実演させた。薄くできた隆志は水の中にすき枠を浮かべ、そこへパルプ液を流し込み、揺することで薄く均一に紙をすくことができることに気づいていた。また、太一はスポンジでしっかり押さえ、水分を絞ることで、四

角くできることに気づいていた。この2人に実演をさせることで、子どもたちに自分の作り方を見つめ直すきっかけにしたいと考えた。授業の中では、教師の予想を超え、「柴田さんみたい」「柴田さんもやった」というつぶやきが出た。子どもたちは、太一や隆志の実演に紙すき名人の柴田さんの作業を思い出したのである。

また、本時では、真美のはがきを紹介することで、渡す相手のことを考え、相手にあったはがきを作ることに着目してほしいと考えた。しかし、真美が思いを語れるようにしておかなかった支援不足と、問い返しのまづさにより、真美の発言に子どもたちは食いついてこなかった。

真美	ピアノの先生がとってもやさしいから、大好きだからピアノの先生にあげようと思いました。
	— (略) —
C	音符、音符。
T	なあに？真美さん。
真美	音符
T	ねっ、そう音符だそうですね。大好きなピアノの先生にあげるから音符を入れた。はい、ありがとう。
T	ね、音符を入れてくれた。はい、では久美さん。
久美	毎日は四角くできななかったけど、今日はやり方を変えたから四角くできました。
T	久美さんもやり方を変えた？どんな風に？どんな風に変えた？
久美	隆志君たちとは違うけど、細かく上手に作ったから、四角くできたけど、窓からとるときにぼろぼろになって残念でした。

(6月29日 授業記録)

久美は、手ですくってていねいに形を作ったことを「細かく上手に」と発言した。しかし、やはり紙をすいたというよりは、パルプ液を並べたという感じなので、ぼろぼろになってしまった。そんな久美はこの授業の隆志の実演を見て心を動かされた。

— (略) — かみすきのやりかたをたかしくんのやりかたにすれば、たかしくんたちみたいにじょうずにできるとおもいます。 — (略) — あしたは、たかしくんのやりかたにしようとおもいます。

(6月29日 久美の学習記録)

「たかしくんたちみたいにじょうずに」というのは、「薄く・四角く」ということである。久美は、薄く四角いはがきに価値を見出し、隆志のやり方をまねすれば、それができると考えたのである。

6回目の紙すきを6月30日に行った。今回、久美は誰にも邪魔されることなく一人でじっくり作ることができた。牛乳パックも一人で1枚分使えて液が余った。

今日、かみすきができました。ピンクのかみすきができました。ももいろのハートをつけてつくりました。しかく

いはがきができました。もとがあまりました。もとをおうちにもってかえて、おうちでかみすきをやりたいです。

(6月30日 久美の学習記録)

※ しかくくておおきいりっぱなはがきができたね。やっぱりくみさんはじぶんだけでしっかりやればできるんだね。なにかやりかたをかえたのかな？

初めて自分で「しかくいにはがきができました」と言えた久美。そして、いつも液が足りなくて困っていたのに、この日は液が余り、家に持ち帰った。この日の日記には、上手にできた喜びが書かれていた。

— (前略) — 今日、かみすきをさいごなので、きのはっぴょうのたかしくんとたいちくんのまねをしたら、ととてもじょうずになってぎゅうにゆうぱっくいちまいを4まいにきただけなのに、かみすきをやってもなくならなくて、ととてもうれしかったです。

(6月30日 久美の生活日記)

「たかしくんとたいちくんのまねをしたら」とあるように、前時のかかわり合いの授業で見た隆志と太一の実演が、久美の紙すきにより影響を与えていることがわかる。また、液が「なくならなくて」うれしかったというところから、今までパルプ液が足りなくて思うように作れなかった経験を多くしている久美らしさが出ている。後日、家庭訪問のときに、余って持ち帰ったパルプ液で作ったはがきを見せてくれた。とても、うれしそうだった。7月6日に最後の紙すきを行った。



(隆志のまねをして水の中ですき枠をゆする久美)

今日、さいごのかみすきでした。さいごにじょうずにできました。たいちくがおしえてくれたから、じょうずにできたとおもいます。しかくできてうれしかったです。

(7月6日 久美の学習記録)

最後の紙すきは、いとこに真っ白のきれいなはがきを作りたいと願い、活動に入った久美。最後は、1人1枚しか作ってはいけないことにした。本当に最後のはがき作りを、もうやり直しがきかないという気持ちで行い、最後の1枚に気持ちをこめて作ってほしかったからである。久美は、途中、太一に少し助けをもらいながら、隆志のやり方をまねして、きれいに作ることができた。



(太一に教えてもらう久美)

#### 4. 自己の成長を振り返る久美

このあと、活動を振り返る作文を書いた。

しがつ? はじめてつくったときにせんせいたちがおしえてくれました。しろいえきとあかいえきをいれてつくるなんておもってなかったから、こんなんでかみができるなんておもいませんでした。

5がつ? 5がつのさいしょは、わくにいれるとこまでし  
かできなかったけど、そのひちょうどしばたせんせいがが  
っこうへくるっていついたから、そのひをたのしみにし  
ていたら、そのひしばたせんせいがおしえてくれたから、  
そのひからじょうずにできました。ろくがつ、じぶんたち  
でかみをつくるなんてびっくりしました。でも、なかなか  
できなかったかみをつくれなかったからかなしかったで  
す。うちでもままにかみをつくってあげたり、ばばにかい  
てあげたりしてうちでつくったけど、わすれてしまったか  
らじぶんでかみがえました。7がつ、もうすぐなつやすみ  
とおもってかみすきももうおわりだとおもって、たのしく  
じょうずにていねいにかみをつくりました。さいごらへん  
に、しかくいじょうずなうすくはがきみたいにつくりまし  
た。さいごのはがきのおもいでそしてはがきそしてみんな  
のえがお、わすれないでいよう。またはがきがつくれるん  
だったらつくりたいです。

(7月11日 久美の振り返りの作文)

「そのひからじょうずにできました」から、柴田さんたちと行った紙すき体験が久美にとっては重要な出来事であったことがわかる。そして、久美は柴田さんのおかげで紙すきが上手になっていったと感謝している。「しかくいじょうずなうすくはがきみたいに」というのが、久美にとっての上手なはがきであり、最初の頃にはもっていなかった価値意識である。久美は、柴田さんや友だちとかかわるなかで、はがきに対する価値意識を更新していったことがうかがえる。それが最後に自分の手でできたことに対して喜びを感じている。「みんなのえがお」とはどういう意味なのか久美に聞いてみたところ、「紙すきをやっているときの笑顔」と答えた。久美自身、紙すきをしてきたなかで、友だちに教えたり教えられたり、けんかをしたりと、いろいろな友だちとかかわりながら成長してきた。そんな久美が自分のことだけでなく、友だちがうれしそ

うに紙すきを行っている様子を見て、それを思い出にしたいと感じていることがわかる。

7月13日に活動を振り返るかかわり合いの授業をもった。ここでは、これまでの活動を振り返って、成長した自分の姿を自覚させるとともに、手作りはがきの価値について気づかせたいと考えた。

浩二	だんだん上手になって来てうれしかった。
T	ほー、だんだん上手にね。では、美咲さん。
美咲	自分が成長したなあ一つて思いました。
T	自分が成長したなあー。みんな、意味わかる?
C n	わかる。
T	どういうことですか? 美咲さん。
美咲	上手になったなあ一つてこと。
T	何が?
美咲	紙すき。
T	ほー。上手になったってこと。成長したなあ一つて。久美さん何?
久美	体が成長するのはあるけど。
T	体が成長するのはあるけど、これは、何?
C	紙すきが成長する一。
C	紙が成長するんじゃないのー?
T	紙が成長するの? これって?
竜也	わかった、紙すきの作り方が上手になった?
T	何? 竜也君、何?
竜也	紙すきの作り方が上手になった。
	— (略) —
千絵	作り方が成長した、柴田さんみたいに。
T	何、何?
千絵	柴田さんみたいに四角いのはがきでできた。
	— (略) —
太一	ぼくは、 <u>こんなにじょうずにできるんだなあ</u> と思いました。
T	うん、こんなに上手に。どうですか。和也君。
和也	初めて薄くできてうれしかった。

(7月13日 授業記録)

美咲が「自分が成長したなあ」と発言したことにより、「成長」ということについて考えることができた。竜也は「紙すきの作り方が上手」と答え、千絵は「柴田さんみたいに」、和也は「初めて薄く」と、それぞれの成長について語った。太一にいたっては、「こんなに上手にできるんだなあ」と、自分を客観視し、その成長に気づくことができていた。これらは、授業前の座席表にはない発言であることから、美咲の発言によって引き出されたものであるといえよう。

太一	隆志君みたいにゆすってみたら薄くできてうれしかった。
T	隆志君みたいに? ゆすった?
C	おれもゆすった。
T	はいどうぞ。では、久美さん。
久美	柴田先生が教えてくれたから、その日から上手にできてうれしかったです。



T	ほー、柴田先生か。うん。はいどうぞ。雅人君。
雅人	加藤英二君のまねをしたら、上手にできた。 (7月13日 授業記録)

久美は「直樹君とやって上手にできた」とか「柴田先生が教えてくれたから」上手にできた、と、友だちや柴田さんたちとのかかわりが自分を成長させてくれたと発言できた。他の子たちも自分が上手になってきた姿を述べる事ができた。しかし本時のもう一つのねらいである手作りはがきの価値については、意図的に考えさせてみたが、なかなかうまくいかなかった。

T	こーんなにいっぱいねえ、みんなのねえいろんな形の手作りはがきをもらいました。で、それとは別に、こういうのもいっぱいもらったんだよね、先生ね。画用紙でみんな書いてくれたやつ。ちょっと、それで、みんなに聞きたいんだけど、こっちのね、いろんな形のこういうはがきと、画用紙の、何が違うんでしょうね、これ。
C	もらう気持ちが違う。
T	はい、何が違うの？
C n	はい、わかった。
T	伸吾君どうですか？
伸吾	えっとねえ、薄っぺらいけど、硬い。ちゃんと四角いけど、
T	どっちが？
伸吾	画用紙。けど、柴田先生と作ってないほうがぼろぼろで、かなり、四角いのが少ない。
T	あっ、こっちぼろぼろね？ぼろぼろ。はー。はいどうぞでしょう。雅代さん。
雅代	手作りはがきは、心がこもっているけど、でも画用紙は……。
T	はいどうぞ。直樹君。 (7月13日 授業記録)

手作りはがきと画用紙を切っただけのはがきとの違いを聞くことで、手作りはがきの価値に気づかせたいと考えたが、「何が違うんでしょうね」という聞き方が良くなかった。この発問で、子どもたちは違いに目がいき、形や色が違うなどの表面的なことについて考えてしまった。そんななかで雅代が「心がこもっている」という発言をしたにもかかわらず、教師がさらりと流してしまったので、他の子にまで広げることができなかった。

授業の終盤では、世奈が手作りはがきは他には「あんまりないもの」と発言した。ここで、先ほどの雅代の「心がこもっている」とつなげてみると、よりふくらんだかもしれない。美咲が一人がんばって「はがきを作ってきてよかった」と言ったが、他の子はなかなかついて来られずに終わってしまった。教師が背伸びをしすぎて、高いレベルの価値意識を求めすぎてしまったからだと思う。

#### IV おわりに

夏休みに、一通の暑中見舞いが届いた。美咲からである。アサガオの押し花の入った手作りはがきで、規格外であるからだろうか、80円切手が貼ってあった。とても心が温まる手紙だった。他にも、家でいろんな手作りはがきを作っている子どもは多くいた。久美もその一人である。それを学校にもってきて見せてくれたり、家族にあげたりしていた。生活のなかに、手作りのよさを生かしている姿がうれしかった。



(美咲からの手作りの暑中見舞い)

久美の学校での様子をみていると、4月に比べて発言を大きな声で堂々と言えるようになった。紙すきを通して自信をつけたようにも見える。他にも、隆志や直樹など、4月当初は内気でおとなしく、発言もほとんどできなかった子が、自信をもって友だちと接し、発言もできるようになった。友だちのよいところを見つけ、ほめ、認めることができた成果であろう。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 愛知教育大学附属岡崎小学校『学びの経験を生かす授業』明治図書、2004年、1頁。
- 2) 同上書、1頁。
- 3) 愛知教育大学附属岡崎小学校『本気で学びつづける子ども／生活科分科の本質に迫る』生活教育研究紀要第57号、2005年、4頁。
- 4) 同上書、5頁。
- 5) 同上書、119頁。